

失うた帳面を記憶力で書き復した人

南方熊楠

青空文庫



五年九号四二頁に宮本君が書いた、周防大島願行寺にむかし住んだ、非常に強記な僧の話は、和漢諸方に古来類話が多い。今ほぼその話を添えられた本人どもの時代の新古に順次して、左のごとく列ね挙げる。

「蜀山人は、（中略）伝えていう、かの人江都小田原町辺の魚肆えどに因みありて往きかいけるが、一日かの家に往きけるおり、店みせにありける帳を把とつて、漫すざろに披閱しけれども、その身に無用の物なれば、熟視するといふにはあらず、物語などする間まに間に、始めより終りまでくりてみたりしが、そのままに搔いやり捨てて氣にもとめず。かくて帰り来たりしが、その家祝融氏の怒りに触れて、

たちまち灰燼となりぬ。よつて蜀山も彼<sup>かしこ</sup>処へゆき、その無事に火を避けしや否をとうに、主答えて、おのおの無事なり、さわれ不慮なる急火にして、家財は大半失いぬ、そはとまれかくもあれ、店にありつる帳を焼きつ。こは浜方より運送の多寡、かつ諸方への出入り勘定、みなことごとく帳に託す。しかればかの帳はわが<sup>しんだい</sup>家産なるを、<sup>あわただ</sup>遽しき騒ぎに紛れ、焼き失いしや<sup>ふつ</sup>弗にみえず。これ身においての大難なりと、眉をひそめて吐息をつけば、蜀山しばしありていうよう、そは例<sup>いっ</sup>もこの店先にある日用諸雑記の帳なるか、もしそれならばわれ覚えたり、いざいざ書いて得させんとて、新しき帳を開き、ことごとく写し<sup>とど</sup>認めて与えにければ、主の男はかつ感じかつ歎びけり、云云」(嘉永三年、中村定保輯『松

## 亭漫筆』二)。

「林道春、(中略)二十五歳の時、江戸に下り、日本橋辺に旅宿せられけるに、本町の呉服屋家城いえき八十郎という者、道春を招き、よりより性理の旨を尋ねければ、道春常に心やすく彼が家に出入りせらる。折から夏のことなるに、道春、家城が家に居ながら、しきりに眠りを催しければ、側そばにありたる大福帳を引きよせ、枕にして、宰予が楽しみに周公をや夢みられしと思わる。ややあつて目をさまし、暮れがたき日を憾みながら、かの帳を披ひらき、端から奥まで一通り繰り返してもとのごとくに収め、暇乞して歸られる。その年の冬不慮に出火ありて、かの家城も類火にあい、難儀の中の小屋掛けへ、道春見舞に来たられ、(中略)まずはおの

おの怪我もせず立ち退かるること珍重なり、して財宝は残りしか。八十郎申すよう、家財をやくこと少しも苦には存ぜねど、苦々しきことには、大切なる懸け帳を焼き失い候て、大分の金銀を捨て申したること残念に候という。道春聞いて、その帳とはいかなる物ぞ。家城答えて（中略）当夏私店わたくみせへ御出での時、取り敢えず枕にして昼寝をなされた大福帳のことでごさムります、（中略）もはやかの帳を失い申す上は、病目やみめに茶を塗つたごとく、座頭の杖に離れしように、便りなく覚え、これからは身代潰し申すより外なく候と、うろろうる涙の悔みを聞いて、道春手をうち、われいつぞや一睡さめての後、かの帳をくり返し、さらさらと一通り披見せしが、その帳の付け自然と心に止まり、今もって忘るることなし、

(中略) まず何にもせよ書いてみん、ひらさら帳をとじよとて、しきりに催促せられければ、是非なく紙を差し出だす。道春筆を執つて、何月何日何貫目、何屋誰へ、縮緬五卷、晒し五反、代幾いく、何某誰殿へ、使い誰と、一字一点毛頭まで、うの毛ほども違いなく、両手に提さげる大帳を半日ばかりに書きしまい、これでも銀かねにならぬかと、空嘯せういておわしければ、家城大いに肝を潰し、絶ぜつじゆ入するほど我がを折りけり。まことに羅山の記臆古今に稀なり。『古文類聚』などをば、暗に覚えて語られける、云々」(元禄十五年板『元禄太平記』七卷一章)。

このほかに水戸義公父子を離間せんと謀つて、義公に手討にされた藤井紋太夫にも、同上の逸話あるを何かで読んだが、その書

名を忘れた。天保八年の自序ある日尾荊山の『燕居雑話』一に、その幼時親交した老人の話に聞いたとて、むかし読書好きの法師が、酒屋で飲みがてら、側らにあつた懸け帳を披閱したが、はるか後にかの酒屋類焼して懸け帳を亡失し、かの僧に語ると、僧しばし小首を傾け、やがて筆取つて、おのれが見たほどの酒の貸し高を、一つも洩らさず書いて取らせた由を記しおれど、いつごろのことか、支那のことか日本のことか、明記していない。

本邦の例で予が知つたは右の通り。さて支那の例は、『松亭漫筆』二に引きあるごとく、明の謝在杭の『五雜俎』六にいわく、  
「人一目して数行俱ともに下る者あり。真に俱に下るにあらず、ただ目捷はやきのみ。遅速相去る、はなはだしきものは四、五倍を差う。



ただ三のみならざるなり。一覽して遺すなきは、すなわちかつてこれあり。閩びんの林誌、雨を避けて染坊ぜんぼうに寓す。その染帳ぜんちようを得て漫すずろにこれを閲し、匆匆として去る。二日を越えてその家回録す。帳を索むる者、紛然として計をなすを知るなし。林またこれを過よぎりていわく、われ能よくこれを記せん、と。筆を取つて疾しるく録すに、一字を爽たがえず、云々」と。この書は万曆三十七年（わが慶長十四年）ごろ成つた証がその巻四にある。林誌もたぶんそのころの人であろう。

これより約四百年前、南宋の費袞が書いた『梁谿漫志』は、予かつて見ないが、『燕居雜話』に引かれある。いわく、「江陰の士人葛君、その名を忘る、強記人に絶す。葛、閩里間に浮沈す。

家の傍らに民の染肆を張るあり。簿書その目を識す。葛かつて酒を被り、たまたまその肆に坐し、手に信せて繙閱す。一夕民家火作り、およそあるところの物、文書をあわせてみな燼す。物主競い来たりて、数倍の売償を求む。民もつて質験するなし。憂撓出づるところを知らず。その子諸父に謀りていわく、われ聞く、里中葛秀才、天性よく記すと、渠かれ、昨わが家を過りよぎ、かつてこの籍を閲す、あるいはよく記憶せん、なんぞ情をもつて叩かざるや、と。即日父子葛に詣りいた、その状をいう。葛笑うていわく、汝が家染肆を張る、かつわれ何に従つてその数を知らんや、と。民拝しかつ泣く。葛また笑うていわく、汝壺酒をもつて来たれ、まさによくこれを知るべし、と。民喜んで亟すみやかに帰り、酒を携えて

至る。葛飲み畢り、命じて紙筆を取らしめ、ために某月某日某人、某の物若干を染むと疏すること、およそ数百条、書くところの月日姓氏、名色丈尺、毫髪ちがいの差なし、民持ち帰り、物主を呼び、読んでもつてこれを示すに、みな頭を叩いて駭き伏す」と。この書き振りより推するに、葛君もほとんど『漫志』の筆者と時を同じうした人と思われる。

それより約三百八十余年前、今年よりは千六百十余年前、唐の李肇が書いた『唐国史補』は、三十余年前見たがまるで忘れた。かつ自分の蔵中にないから、また『燕居雑話』から孫引きする。いわく、「陳諫なる者、市人にて強記なり。たちまち染人が、歳ごとに染むるところの綾帛の尋丈尺寸を籍して簿となし、合囲す

るに遇う。諫、泛覽してことごとくこれを記す。州県の籍帳、すべて一閱するところ、終身忘れずと」。

もつとも古いところでは、今より約千八百年前成った、班固の『前漢書』五九の張安世の伝にある。「上、河東に行幸す。かつて書三篋を亡<sup>うしな</sup>う。詔して問うに能<sup>よ</sup>く知る者なし。ただ安世これを識り、〔以下欠文〕」

# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻44 記憶」作品社

1994（平成6）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「南方熊楠全集 第六巻」平凡社

1973（昭和48）年6月発行

入力：向山きよみ

校正：小林繁雄

2011年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 失うた帳面を記憶力で書き復した人

南方熊楠

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>